様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月１０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間： 2007～2009
課題番号：19520479
研究課題名（和文）ＡＬＴと日本人教師の統合的視点からの『小・中英語ＴＴの基盤作りモデル』の構築
研究課題名（英文）A Model for Success at Team-Teaching in the Elementary and Junior High School English Classroom from an Integrated Viewpoint of ALT and Japanese Teacher

研究代表者
HOOGENBOOM RAY（RAYMOND B. HOOGENBOOM）
群馬大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：80436295

研究成果の概要（和文）：日本人教師が英語母語話者のＡＬＴ（言語指導助手）と二人で行うティーム・ティーチングは、今日の英語教育の典型的な指導形態である。本研究は、ティーム・ティーチングの質の向上と効率化をどのように図るかについて、小・中学校の英語教育のつながりを視野に入れながら、日本人教師とＡＬＴ間の意思疎通のモデルを構築し、教員研修に実践的に役立つマニュアルを、２枚組ＤＶＤ・冊子・表現カードの３種類の形式で発信している。

研究成果の概要（英文）：Team-teaching between a Japanese teacher and an English-speaking ALT (Assistant Language Teacher) is one of the most typical teaching formats in the current English language classroom in Japan. This study established a communication model of successful team-teaching for teachers, with consideration for coherence in English education between the elementary and junior high school levels. The model is presented as a practical manual and consists of two DVDs, a booklet, and a set of basic English expression cards with Japanese translation, for serving teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：英語教授法
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：ティーム・ティーチング、ＡＬＴ、ＪＴＥ、ＨＲＴ、コミュニケーション能力、英語教育、英語活動、外国語活動

１．研究開始当初の背景

(1)英語指導助手は今から30年ほど前に導入されたが、英語の授業における日本人教師と英語指導助手のティーム・ティーチングは、現在では極めて一般的な学習指導形態となっている。例えば、平成19年度における群馬県の実情（平成18年2月群馬県教委調べ）は、以下の通りであった。中学校では、180校（養護学校を含む）全校の英語の授業で日本人英語教員とALTとのティーム・ティーチングが行われていた。また、小学校では、340校全校の「総合的な学習の時間」で英語活動が行われており、その大半が担任教師とALTとのティーム・ティーチングであった。特に、本研究の立案時には、小学校における英語活動の「必

修化・領域化」の問題が論議の最中であったが、ALTが英語活動に関与している割合は非常に大きく、また、ALTとティーム・ティーチングを行う小学校教員の大半は英語を専門としない担任教師であるため、ティーム・ティーチングの成功を目指すためには早急かつ実践的な支援の必要性が明らかであった。このように、「ALTとのティーム･ティーチング」の形態は英語教育（英語活動）において大きな割合を占めるため、一貫した視野に立ってその質と効率を高めることは、英語教育の向上に直接関わる重要かつ喫緊の課題であると考えられた。

(2)「外国語」としての英語教育は、英語圏で生活しながら英語を「第二言語として習得（獲得）する環境」と大きく異なる。外国語の環境下では、日常生活で英語を使うことは皆無に等しい。すなわち、自然で直接的なインプットの欠如は、言語・文化への理解と意思疎通を図る積極性を踏まえたコミュニケーション能力を築く段階的な支援をすることにとって、非常に大きな痛手である。しかし、こうした外国語の環境下にあっても、ALTの存在が十分に生かされれば、コミュニケーション能力を育成していくためには非常に有効な手段となる。小学校英語の歴史は浅いとはいえ、教材・教具等は数多く出回るようになり、中学校では教科書に数多くの工夫がなされ、質的な向上が見られるようになった。しかし、こうした教材等が揃っていても、「それらをどうALTとのティーム･ティーチングで生かすのか」「ALTの生きた存在をどう学習者のために発揮するのか」という課題が解決されない限り、ALTの存在は十分活用できない。中学校ではALTの「生きた」役割・機能を明確に生かせない場面が多くあり、小学校では担任教師がALTとの意思疎通が十分に図れないため、ALTに全てを任せ、日本人教師の役割・機能が生かせない場面が圧倒的に多い。また、授業外での意思疎通も重要である。以上の背景から、ティーム・ティーチングの基盤となるALTと日本人教師の役割と機能を明確にし、互いの意思疎通をどのように図るべきかを、両者の視点を統合しつつ、明らかにしていくことが喫緊の課題であると考えられた。

２．研究の目的

本研究は、ALTと日本人教師の双方の統合的視点からの『ティーム･ティーチングの基盤作り』に焦点化した、ALTとのティーム･ティーチングの質の向上と効率化の研究である。研究の主な目標は、小学校英語活動と中学校英語教育の連続性を視野に入れ、それを体系化するとともに、背景理論を現職教員とALTおよび教師を目指す学生に分かり易いように組み込み、小・中英語ティーム･ティーチングマニュアルとして実践に活用できるマニュアルモデルを構築することである。モデルの構築の焦点は、以下の2つの領域である。

(1) ALT と日本人教師の双方の統合的視点からのそれぞれの役割・機能の明確化
(2) ALT と日本人教師の双方の統合的視点からの相互の意思疎通のあり方

３．研究の方法

本研究は、『ティーム・ティーチングの基盤作り』のモデルの構築を通して、英語教育における教育現場への支援と教員養成での手立てへの貢献を目指すことから、研究の方法は実践性を重視した以下の３つに大別される。

(1)「実態調査」
①ALTおよび日本人教師を対象とした質問紙による実態調査やインタビュー
②小学校と中学校の教育現場と教育実習におけるティーム･ティーチングの観察
③英語教員を目指す学生を対象とした質問紙による実態調査やインタビュー
④指導書や教材等の分析

(2)「モデルの構築」
①ALT と日本人教師の役割・機能の明確化と体系化
②ALT と日本人教師の統合的視点からの相互の意思疎通の場面の明確化と体系化
③(1)①から④の実態調査により得た情報を踏まえた上での(2)①の修正
④(1)①から④の実態調査により得た情報を踏まえた上での(2)②の修正
⑤(2)③および④の学習指導要領との対応
⑥(2)③から⑤を踏まえた『ティーム・ティーチングの基盤作り』モデルの構築
⑦モデルの提示用スライド作成
⑧モデルの修正

(3)「モデルのマニュアル化」
①現職教員を対象とした研修会におけるモデルの提示とフィードバックの収集
②ALT を対象とした研修会におけるモデルの提示とフィードバックの収集
③学生へのモデルの提示とフィードバックの収集

④マニュアルの構想
⑤DVD（2 枚組）の作成
⑥冊子の作成
⑦基本英語表現カードの作成

４．研究成果

(1)本研究の初期調査として群馬県内小学校教員190名を対象に平成19年に行った質問紙調査では、ALT とのティーム・ティーチングを行っている教師は97.4%（未回答１%）、全く行っていない教師は 1.6%であった。ALT とのティーム・ティーチングを行う頻度は、約80%が活動の全てあるいは半数以上、半数以下が 17%強であった。ティーム・ティーチングを行っていると回答した教師の 4 割弱が活動の「ほとんど全てを ALT に任せている」と回答し、「どちらかというと任せる方が多い」と回答した教師は 4 割強であった。この結果から、ティーム・ティーチングとは呼ぶものの、実情は、日本人教師と ALT の双方が十分に機能している本来のティーム・ティーチングの姿とはかけ離れたものであるであることが分かる。また、ALT とのティーム・ティーチングに関して課題であると思うことについての回答（複数回答）は、「打ち合わせを行えるようにすること」63%、「役割分担の明確化」55%、「自分の基礎的な英語力向上」50%、「ティーム・ティーチングに適した活動を考えること」40%、「児童の様子を ALT に伝えること」38%などであった。

小学校教員対象の詳しい記述やインタビューによる調査では、中学校英語教員の回答には見られなかった「言葉の壁や文化の壁で ALT との意思疎通が図れない」という回答が圧倒的であった。小学校には日本語に堪能な ALT を配置している学校もあるが、基本的な表現でも良いから ALT との意思疎通ができる手段を習得したいと考えている教師が非常に多いことが分かった。

次に、小学校教員 194 名、中学校教員 40 名を対象に平成 19 年に行った質問紙調査では、英語が専門の教師は小・中学校ともにほぼ 100%が「英語が好き・好きな方」「得意・得意な方」と回答したが、英語の専門外の小学校教員の 35%が「英語が嫌い・嫌いな方」、73%が「苦手・苦手な方」と答えている。一方、「英語の授業や活動を児童・生徒が楽しんでいると思うか」という質問に対し、英語を専門とする小学校教員 96%、専門外とする小学校教員 86%、中学校英語教員 80%が「楽しんでいる・楽しんでいる方だ」と回答した。また、本調査では、『ティーム・ティーチングの基盤作り』モデルに関わる事項として、10 項目の授業・活動内での英語使用と 13 項目の授業・活動外での ALT との意思疎通に関する意識と実践度を調査し、その差異を分析した。授業・活動内での英語使用は、児童・生徒のために英語使用の場面を増やすだけでなく、ALT との意思疎通においても有効な手段と考えるため、クラスルーム・イングリッシュを中心として、あいさつ・活動・モデル提示・活動方法・基本的な指示・ほめ方などでの英語使用を質問項目に含めた。授業・活動外の意思疎通については、ALT を職員へ紹介すること、学校や構内設備を案内すること、連絡方法などの確立、日程や行事に関する連絡の徹底、決まりや目標の説明、授業などの連絡、授業や活動で行うことの連絡、事前打ち合わせの実行、役割の明確化、授業や活動後の改善点等の話し合いなどの項目を含めた。いずれの項目に関しても、重要度の認識は高かったが、実践度はほとんどそれに伴っていない。特に小中学校を通じてそれが顕著であった項目は、授業・活動内での英語使用では、あいさつとほめること以外全てであり、授業・活動外では、ALT を職員全体に紹介すること、学校の設備などを案内すること、決まりなどを説明することなどであった。小学校と中学校で明確な差が見受けられたのは、役割分担を明確にすること、授業後に改善点を話し合うことなどで、小学校の実践度が非常に低いことが分かった。また、項目によっては、英語が専門である小学校教員と専門でない教員の実践度に大きな差が見られた。これには、活動前に ALT に分かるように指導案やメモなどを見せたり渡したりすることなどが含まれた。

(2)平成21年度に群馬県太田市で55名の小学校教員とその ALT 19名を対象に行った質問紙調査では、学修指導要領の「外国語の音声や基本的な表現に親しませること」の理解について、ALT と日本人教師の意識の違いが浮き彫りとなった。ALT は 100%がこの表記を認識していると回答したのに対し、日本人教師は 87%のみが認識していると回答した。「親しませること」の解釈として、24 の選択肢（複数回答可）と自由記述できる欄を合わせて設けて尋ね、回答の分析を行った。顕著な結果としては、日本人教師の意識が「楽しませる」ことにのみ集中しているのに対し、ALT はこの意識も高かったものの、「実際に聞かせる、練習させる、体験させる、気付かせる」という意識が高いことであった。特に「話したり聞いたりする機会、文化的な興味の目覚め、英語を使うことへの自信」など、日本人教師は 20%ほどしか意識していない項目に関して、80%から 90%の ALT が「親しませること」の意味に含めていることが分かった。こうした結果から、ALT と日本人教師の意思疎

通と役割分担の重要性が改めて明示された。

(3)本研究で行った実態調査および授業や活動の観察等から、ALT の機能は以下のように捉えることができる。
①機能１：英語使用のモデル
②機能２：同じ空間に存在するコミュニケーションの相手
③機能３：異文化理解・人間理解の生きた情報源（違いのみを追及するのでなく、人間としての共通点を見出させることが重要である。）

(4) 本研究で行った実態調査および授業や活動の観察等から、日本人教師の機能は以下のように捉えることができる。
①機能１：学習活動の主導者
②機能２：学級内、学習活動時の秩序保持者
③機能３：異文化間コミュニケーションと外国語としての英語使用に挑戦するモデル

(5) 本研究で行った実態調査および授業や活動の観察等から、日本人教師と ALT の役割は、以下の項目について教師間で明確化され、共有化される必要がある。特に、①②③⑥⑧⑨⑩⑭⑯は日本人教師が、⑤⑫⑬は ALT が必然的に中心となるが、その他は場合に応じて両者が分担あるいは共に担う役割である。
① 打ち合わせや相談する時間などを主導して企画する。
② 活動全体（学年・年間・一連の活動）の目標を設定する。
③ 各時間や活動の目的を設定する。
④ 授業や活動での学び方や教え方について助言や提案をする。
⑤ 異文化･国際理解についての情報を提供する。
⑥ 学習活動案を作成する。
⑦ 教材を作る・準備する。
⑧ 授業や活動に当たり､大切と思われる児童・生徒の特徴や留意点を示す。
⑨ 授業・活動中の総合的な指揮をとる。
⑩ 授業･活動中の児童･生徒の秩序を整える。
⑪ 授業・活動でのリーダー役を務める。
⑫ 英語で各種インプットを供給する。
⑬ 英語の発音･イントネーション･強勢などの母語話者としてのモデルを示す。
⑭ 英語の発音･イントネーション･強勢などの学習者としてのモデルを示す。
⑮ 児童･生徒の中入り積極的に活動に参加する。
⑯ 分かりにくいことや活動の仕方を明確に説明する。
⑰ 活動中、必要に応じて仲介役となる。
⑱ 児童･生徒の取り組みや進歩を評価する。
⑲ 行った活動の良かった点･悪かった点を評価する。
⑳ 次回以降の活動向上策を考える。

(6) 本研究で構築した『ティーム・ティーチングの基盤作り』のモデルの骨子は、以下のとおりである。
①英語の指導形態とティーム・ティーチングの利点、困難点：英語の学習指導では、日本人教師が 1 人で教えるソロ・ティーチングと 2 人の教師が教えるティーム・ティーチングが代表的な指導形態である。ティーム・ティーチングではソロ・ティーチングより活動の種類や幅が広がり、より細かい指導ができる一方で、教師間の意思疎通が成功の鍵を握る重要な役割を果たすことが認識されなければならない。同時に役割の明確化が非常に重要である。
②外国語としての英語と ALT の存在の意義:英語は､外国語として習得されるため、周囲で話されていない、音声や統語構造が異なる、音と文字の対応が異なる、不自然な設定での習得である点などについて、教師が十分に認識する必要がある。これらにおいて、ティーム・ティーチングで ALT の存在を効果的に生かす必要性が明確である。特に重要な点として、ALT の存在の意義は、英語使用の必然性、異文化間・異言語間の意思疎通の体験の機会、人間理解の体験的機会の 3 点が挙げられる。したがって、ALT とのティーム・ティーチングの意義は、外国語の環境下でも英語を使う必然性があること､「英語使用のモデル」を直接提示できること､異文化間･異言語間の生きたコミュニケーションを提示し体験させられること、文化と言語の相違点・類似点に触れられる機会を作れることが主なものとして挙げられる。意義具現化のためには、先の(3)で挙げた ALT の機能を生かすべく、(4)のように日本人教師が機能しなければならない。
③ティーム・ティーチングに向けての ALT との意思疎通：(1)で述べたように、ティーム・ティーチングという名のもとに行われている英語活動も、本来あるべきティーム・ティーチングの姿ではない場合が多いことが懸念される。授業の観察などからも、小学校では ALT に任せる形が多く、中学校では ALT がコミュニケーションの相手としてではなく、いわゆるテープレコーダー的な役割だけに終始している事例が多くみられた。また、ティーム・ティーチングの質の向上と効率化のためには、ALT とのパートナーシップの確立が授業外でも重要である。すなわち、ALT と日本人教師はティームとして機能すること、同じ児童・生徒を教えるパートナーであること、一部の担当

者だけでなく教職員全体がALTとの意思疎通を図れる基盤を築くことが重要となる。
④意思疎通を図るべき場面：
ALTとの意思疎通は、「英語の授業・活動に関する意思疎通（事前、授業・活動中、事後）」および「管理・経営に関する意思疎通」の2種に大別できる。この双方での意思疎通は、ティーム・ティーチングの基盤として重要な役割を果たす。したがって、本モデルでは、これらで考えられるさまざまな場面について、意思疎通の具体例を挙げている（授業・活動に関する意思疎通の具体例＝35、管理・経営に関する意思疎通の具体例＝11、マニュアル冊子およびカード参照）。
⑤ALT と日本人教師の役割分担：本モデルでは、(5)で挙げた20の項目を点検するためのチェックシートを日本語と英語で提示している。
⑥英語の授業の目標とコミュニケーション能力：新学習指導要領における英語教育の目標は、コミュニケーション能力の素地・基礎の育成を通して三段階で行うことである。外国語としての英語習得において教室内に存在するネイティブ・スピーカーの役割は重要であり、その存在をコミュニケーション能力の育成にどのように効率的に活用するかを考えるには、「コミュニケーションとは何か」、「コミュニケーション能力とは何か」、「コミュニケーションに必要なものは何か」を考えなければならない。本モデルでは、「コミュニケーション」は単なる思いや情報のやり取りではなく、反応の連鎖であると定義し、「コミュニケーション能力」を正しく文を作る力、場面・状況への対応、まとまり・つながりを築く力、意思疎通の効率化を図る力の4つの要素で定義する。また、「コミュニケーションに必要なもの」は、コミュニケーションを図る相手、図る場面、図る目的、図るための道具（言語やジェスチャーなど）とそれを使う力の4つとする。

(7) 本研究で構築した『ティーム・ティーチングの基盤作り』のモデルは、実践に即するよう、理論的な背景をより理解し易く示し、具体例を添え、以下の3種類から成るマニュアルとして提示した。
①ＤＶＤ２枚組
その１：「ティーム・ティーチングの成功のためのALTとの意思疎通」（約60分、動画を用いた意思疎通の場面集、制作協力は群馬大学教育学部附属小学校）
その２：「ティーム・ティーチングの成功のための ALT との意思疎通―英語表現編―」（約60分、スライドを用いたモデルの提示と意思疎通に実践的に役立つ基本的な英語表現集）
②冊子「ティーム・ティーチングの成功のための ALT との意思疎通と基盤作り」（A4横全69ページ両面印刷、用紙4色分け、カラーページ含む、日・英二言語表記）
③カード「ティーム・ティーチングの成功のための ALT との意思疎通と基盤作り―意思疎通例　表現カード―」（はがきサイズ横全50カード両面印刷、用紙3色分け、日・英二言語を対照的に裏表に表記）
　マニュアルは、群馬県教育委員会義務教育課を通じて群馬県教育委員会、群馬県総合教育センター、群馬県内教育事務所5か所、および市町村教育委員会36か所に教員研修用として配布した他、教員研修や教員養成でも発信・活用している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① レイモンド　Ｂ．フーゲンブーム、上原景子、外国語としての英語教育におけるコミュニケーション能力の向上に向けて、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、査読有、第59巻、2010、pp.103－112
②Raymond B. Hoogenboom, Keiko Uehara, Keisuke Wada, James Catchpole, Team-teaching and familiarizing pupils with English sounds and basic expressions through elementary school English Activities, Research in Educational Practice and Development, Gunma University, 査読有, No.27, 2010, 219-236
③Keiko Uehara, Raymond B. Hoogenboom, A grammatical communicative approach for development of EFL communication ability in Japanese school education, Journal of Teaching Methodology, Gunma University, 査読有, No.9, 2010, 53-66
④ Raymond B. Hoogenboom, Basic English expressions for efficiency enhancement of team-teaching with ALT in English Activities, Annual Reports of the Faculty of Education, Gunma University, Cultural Science Series, 査読有, Vol. 58, 2009, 101-108

〔学会発表〕（計１３件）

①上原　景子、楽しい英語活動をとおしたコミュニケーション能力の素地作り、平成21年度深谷市立花園小学校・花園中学校小学校外国語活動研修会、2009.12.3、深谷市立花園小学校（埼玉県）

② Raymond B. Hoogenboom, EFL Team-Teaching from Theory to Practice, 2009 ALT & JTE Mid-Year Seminar, Gunma Prefectural Board of Education, 2009.11.27, 生涯学習センター（群馬県）

③ 上原　景子、「コミュニケーション能力の基礎」の育成における生産性の向上、平成21年度群馬大学教育学部附属中学校公開研究会、2009.9.11、群馬大学教育学部附属中学校（群馬県）

④ Raymond Hoogenboom、上原　景子、小学校外国語活動の基本的な考え方と進め方―英語ノートの活用とALTとのティーム・ティーチング―、平成21年度太田市教育研究所「学習指導法講座」第2回、2009.8.24、宝泉行政センター（群馬県）

⑤ Raymond Hoogenboom、上原　景子、ALTとのふれあいを生かした楽しい英語活動、平成21年度片品村立片品小学校小学校外国語活動研修会、2009.8.20、片品村立片品小学校（群馬県）

⑥ Raymond Hoogenboom、上原　景子、ALTの存在を生かした楽しい英語活動、平成21年度深谷市立八基小学校小学校外国語活動研修会、2009.8.17、深谷市立八基小学校（埼玉県）

⑦ 上原　景子、Raymond Hoogenboom、James Catchpole、飯泉　尚士、Brent Thomas、小学校教員のための英語ワークショップ：「英語ノート」を用いたALTとのやさしいティーム・ティーチングセミナー、平成21年度群馬大学公開講座、2009.7.24、群馬大学（群馬県）

⑧ 上原　景子、Raymond Hoogenboom、英語ノートを使ったALTとの効果的なティーム・ティーチング、平成21年度第１回伊勢崎市小中一貫英語教育研修会、2009.7.23、赤堀公民館（群馬県）

⑨ Raymond B. Hoogenboom, TESOL, 2008 ALT & JTE Mid-Year Seminar, Gunma Prefectural Board of Education, 2008.11.27, 生涯学習センター（群馬県）

⑩上原　景子、Raymond Hoogenboom、Keauna Kimmel、飯泉　尚士、小学校教員のための英語ワークショップ1：ALTとの意思疎通の成功に向けて、平成20年度群馬大学公開講座、2008.8.7、群馬大学（群馬県）

⑪上原　景子、Raymond Hoogenboom、Keauna Kimmel、飯泉　尚士、小学校教員のための英語ワークショップ2：ティーム・ティーチングの成功に向けて、平成20年度群馬大学公開講座、2008.8.7、群馬大学（群馬県）

〔図書〕（計２件）

①上原　景子、レイモンド・フーゲンブーム(監修)、開隆堂、これでできる！『英語ノート１』完全対応　授業指導書１パーフェクト版 ティームティーチング用、2010、112

①上原　景子、レイモンド・フーゲンブーム(監修)、開隆堂、これでできる！『英語ノート２』完全対応　授業指導書２パーフェクト版 ティームティーチング用、2010、112

６．研究組織

(1)研究代表者

HOOGENBOOM、RAY（RAYMOND B. HOOGENBOOM）

群馬大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：80436295

(2)研究分担者

上原　景子（UEHARA KEIKO）

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：40323323